

葬られる声(中)

「災害関連死」と「震災に関連した死」

ルポライター

山川 徹

●やまかわ・とおる 1977年生まれ。捕鯨、マタギ、ラグビーなど幅広いテーマで取材・執筆を続けている。著書に『それでも彼女は生きていく』(双葉社)など。

冬の夕方、高速バスの車窓を眺めていると陽が落ちた空に銀色の何かがざらりと鈍く光った。街灯がまばらな夕闇に目を凝らす。ヘッドライトに照らされて異様な光景が浮かび上がる。津波に浚さらわれた真つ暗な更地の真上を、高架道路のようなどてつもなく巨大な建造物が、山肌が露わになった台地から伸びて川を越えている。なんだ、これは……。二〇一四年二月上旬、約一年半ぶりに訪れた岩手県陸前高田市にいきなり出現した巨大な異物に目を見張った。

調べてみると、復興工事の土砂を搬出する総延長約三キロ、幅一・八メートルの巨大ベルトコンベヤーだという。山を最大八〇メートル削り、浸水地域を約一〇メートル嵩上げて新たな町を作る。一時間に約六

阪神・淡路大震災の発生時から二〇一二年に亡くなるまで誰にも看とられずに仮設住宅で命を終える人々を支援し、記録した額田勲医師である。

〈大災害に襲われた大都市・神戸の復旧は早かった。高速道路、地下鉄、そして港湾など社会的基盤は例外なく、当初の見込みをはるかに上回る速さで、着実に回復していった。〉

しかし、対比的に被災者の人間の復興はあまりにも遅々としている。見果てぬ再興の夢を追いながら、仮設住宅に生を終えた人たちは、おびただしき数に上るはずである。

兵庫県警の検死結果などをもとに計算すると、二〇一三年末までに兵庫県内の仮設住宅や復興住宅で孤独死した人は一〇五七名に上る。時間が経ち、復興住宅に入居するのは被災者だけではないなど様々なケースがあるので、孤独死すべてが広い意味での「震災に関連した死」とはいえない、と県警担当者はいう。

一方「災害関連死」にも明確な基準はない。災害弔慰金の支給を申請すると、災害弔慰金審査委員会(以

〇〇〇トンもの土砂を運搬する機能を持ち、ダンプカーなどの重機を使えば九年間かかる作業を一年半に短縮させる施設である。とくに気仙川に架かる主塔の高さ四二・六メートル、長さ二二〇メートルの吊り橋は「希望のかけ橋」と呼ばれる。

町にとっては復興の象徴なのかもしれない。けれども——寒々とした暗闇にそびえる鉄塔は、この町で犠牲になった約一八〇〇人の墓碑のように映った。

孤独死と関連死

急激な風景の変化に『孤独死 被災地で考える人間の復興』(岩波現代文庫)の一節を思い出した。著者は

下、審査会^①で審査されて認定される仕組みになっている。一九七三年に災害弔慰金の支給等に関する法律が制定され、阪神・淡路大震災で災害関連死が初めて認められた。兵庫県だけで九一九名。これは復興住宅の「震災に関連した死」とは別の数字である。いうまでもないが〈仮設住宅に生を終えた人たちは、おびただしき数に上る〉のは神戸だけの現実ではない。

「災害関連死の実態が見えてこない原因の一つが申請主義です」と宮城県仙台市を拠点にして被災した児童を支えるNPO「子どもグリーンフサポートステーション」の代表の西田正弘さん(54)は指摘する。

西田さん自身も一二歳のときに父親を交通事故で亡くした。奨学金をえて大学を卒業し、親を亡くした子供を支援する「あしなが育英会」に就職。二〇〇〇年からは自殺遺児のサポートを続けてきた。

「災害や事故で大切な人を喪なくってエネルギーを奪われた遺族にとって、申請の手続きは大変な労力を強いられます。しかも死別したばかりの混乱した状況では、どんな手続きが必要なのか、どんな支援を受けることができるのか判断できない。申請にどれほどのエネルギーが必要か……それが理解されていない」